

## 戦間期における「フェリブリージュ」再編の試み —「フェデラリズム」の理念の継承と実践—

福 留 邦 浩

はじめに

第1章 1920年代における「フェリブリージュ」をめぐる動向とその特徴

第1節 雑誌『オック』

第2節 ジュヴォー体制

第2章 1930年代における「オクシタン研究協会」と新聞『オクシタニオ』の台頭

第1節 「オクシタン研究協会」設立と正字法論争

第2節 新聞『オクシタニオ』

第3章 戦間期における「フェデラリズム」の理念の継承

第1節 「マイヤーヌ宣言」

第2節 シャルル・カンブルー

まとめ

はじめに

本稿は、1854年にオック語の復興を目的として設立された文芸結社「フェリブリージュ」の活動を、1920年代から1930年代のいわゆる戦間期に焦点を絞り、会員（フェリーブル）らの政治的信条に注目して考察することを目的とする。

筆者は「フェリブリージュ」創設（1854年）から第一次世界大戦前夜までの時期について、上記の課題について既に考察を行った。その結果次のようなことが明らかとなった。第一に、「フェリブリージュ」創設の立役者フレデリック・ミストラルが、表立っては非政治性を表明しつつも、分派活動を支持することで自らの政治的主張を間接的に表明していたこと、第二に、その政治的主張はブルードンの「フェデラリズム」の理念の影響を受けており、その理念はドゥ・リカールやモーラス、ドゥヴォリュイ、ドゥ・ヴィルヌーヴ・エスクラボンら後継世代のフェ

リーブルらに継承されているという点である<sup>1)</sup>。本稿においては、その「フェデラリズム」の理念が、どのように戦間期の後継世代に受け継がれていったかを考察し、さらにその中身についても考察を加えたい。なぜならば、かかる戦間期の動きは、「フェリブリージュ」の非政治性の標榜により活力を失いつつあったオック語復興運動に、現実社会との接点を与え、それまで知識人の関心事にすぎなかった「オクシタン問題」が、大衆的な運動として展開していく転換点となったと考えられるからである。

## 第1章 1920年代における「フェリブリージュ」をめぐる動向とその特徴

この章では、第一次世界大戦がいかなる影響を「フェリブリージュ」に与え、そしてその後の「フェリブリージュ」の活動を変容させていったのかを、組織の周辺と内部に分けて考察することとしたい。

### 第1節 雑誌『オック』

1914年は、二つの理由から「フェリブリージュ」にとって大きな転回点となる年である。第一次世界大戦が勃発すると、多くのフェリーブルらが軍隊に招集され、「フェリブリージュ」はその活動が立ち行かなくなる瀬戸際の状況に追い込まれた。それまで定期的に発行されていた雑誌や新聞も、紙不足と紙価の高騰により廃刊または不定期発行となった<sup>2)</sup>。当時の「フェリブリージュ」の活動状態について、シモン・カラメルとドミニク・ジャヴェルは「会合を行わない『エスコロ』<sup>3)</sup>、なんの役にも立たない宴会、フランス語しか聞かれない会議・・・」<sup>4)</sup>と表現している。

しかし一方で、故郷を遠く離れた戦場において、若いフェリーブルらは「エスコロ」を組織し、新聞雑誌をも発行していた<sup>5)</sup>。彼らは死と隣り合わせの極限状況の中でもわずかの余暇を利用して、オック語の習得はもとより、気晴らしのためのコンサートや演劇の上演などもおこない、1916年と翌17年には、聖エステル祭を「塹壕のなかで」挙行了たのである。彼らは他の戦地のフェリーブルや銃後のフェリーブルらとも機関紙を通じて交流し、カプリエのヴァレール・ベルナル Valère Bernard も彼らの活動を高く評価していた。こうした前線にいたフェリーブルらの発言力が戦後、徐々に高まっていくのである<sup>6)</sup>。

こうした中で、彼らはこれまでの「フェリブリージュ」の活動のあり方、とりわけ「コンシストワール」のあり方を批判的に検討し始めることとなる。たとえばルイ・アリベール Louis Alibert は「アカデミーのように組織されたコンシストワールは、その主要な任務を果たすことに成功しなかった。コンシストワールは演説と宴会、そして成果なき示威行動に迷い込んだ」<sup>7)</sup>と批判している。同様の批判は、次のように戦間期を通じて見ることができる。1931年、

スペインで第二共和政が成立しカタルーニャが自治を認められると、その動きに刺激を受けたレオン・テシエ Léon Tessier も「フェリブリージュ」の活動に対して、「コンシストワールとは何だ、マジョラルたちは何をしているのか。なぜ『フェリブリージュ』は（カタルーニャの）運動についていこうとしないのか。」<sup>8)</sup>と激しい批判を行っている。

1920年4月には、エクス・アン・プロヴァンスにおいて「青年地域主義者同盟会議」が開催され、若いフェリーブルらが地域の社会活動家や経済人らとともに参加し、それまでの過去志向の活動を脱して、自分たちの「くに」の現実の社会生活や経済生活に直面しようとする意気込みを見せた<sup>9)</sup>。

このような状況のなかで、1922年3月、ミストラルの墓前において追悼式典が行われた際、いわゆる「マイヤーヌ宣言」なるものが、ベルナル・ドゥ・モンター - マンス Bernard de Montaut-Manse によって読み上げられるという「事件」がおこった。これは、1892年の「フェデラリズム宣言」の延長上に位置づけられるものであり、いわば「新フェデラリズム宣言」と考えられるものである<sup>10)</sup>。

この宣言文を起草し、署名したのはどのような人々であろうか。宣言文を起草したのは、フレデリック・ミストラル・ヌヴー Frédéric Mistral (neveu)（初代カプリエの甥でカプリエと同名であり、「ヌヴー（甥）」をつけて区別する）の他、フォルコ・ドゥ・バロンセリ - ジャヴォン Folco de Baroncelli-Javon（侯爵）、ジョゼフ・ダルポー Joseph d'Arbaud らであった<sup>11)</sup>。さらに、宣言文に署名した人物として、アドルフ・ラジョワニー Adolphe Lajoinie の他に、フィラデルフ・ドゥ・ジェルド Philadelph de Gerde やルネ・ファルニエ René Farnier, シマン・パレー Simin Palay, ミシェル・カメラ Michel Camélat, ピエール・フォンタン Pierre Fontan, ダニエル・エスティユ Daniel Estieu, レオン・テシエ, ピエール・ドゥヴォリュエ Pierre Devoluy らの名をあげることができる<sup>12)</sup>。

この「マイヤーヌ宣言」によって具体化したことは「南仏国民要求行動委員会 Comité d'Action des Revendications Nationales du Midi」の設立であった。実は既にリムーザン地方でもファルニエによってフェデラリズムのグループが設立され、トゥールーズにも「オック地域主義同盟 Ligue Régionaliste“OC”」が存在していた。最終的にこれらの動きを結び付けるような形で、1923年、「南仏祖国同盟 La ligue de la Patrie Méridionale（別名「オック諸国連盟」Fédérarion des Pays d'Oc）」がトゥールーズにおいて設立されたのである。

「南仏祖国同盟」は南仏全体およびその住民を対象とした最初の政党として設立された組織である。設立者は「マイヤーヌ宣言」起草に携わったミストラル・ヌヴー、ドゥ・バロンセリ - ジャヴォン、ダルヴォーらであったが、この運動を実質的に牽引したのはカミュー・スーラ Camille Soulat とイスマエル・ジラルル Ismaël Girard であった。その政治プログラムとして、「フランス合衆国 Républiques Françaises」を構成する諸地方のために公的な二言語主義を、

そして中央政府が宣戦布告を行った場合、それを地方政府が批准する権利などを要求している<sup>13)</sup>。これは大革命以前の「州」の連邦という点で、アンシャン・レジームの復活を主張する王党派とも符節を同じくするものであった。

さらに「南仏祖国同盟」と同じ年に設立されたのが「オクシタン研究学院 *Instituts d'Etudes Occitans* (IEO)」であり、もともとは「同盟」の下部組織として出発した機関である<sup>14)</sup>。しかしながらその活動の実態はオック語の書籍の見本市を開催する範囲に限られていた。また機関誌として『オクシタン年報』が発行され、「同盟」や IEO のメンバーがその寄稿者となっていた。

第一次世界大戦から 1920 年代にかけての時期は、退嬰した「フェリブリージュ」を政治的な方向で再生させるべくフェリーブルらが活動した時期と考えることができる。なぜならば、その具体的な動きとして「南仏国民要求行動委員会」があり、その発展形態が「南仏祖国同盟」であったと考えられるからである。しかしながら、それらは成熟することなく翌 1923 年には消滅してしまった。その原因としてロラン・アブラートは確かな理由はわからないとしながらも、参加者のイデオロギーの多様性が「同盟」内になんらかの緊張を引き起こしたこと、アヴィニオンを本拠地とするフェリブリージュにとって、「南仏祖国同盟」や IEO がトゥールーズを拠点として活動を展開することへの反発などを挙げている<sup>15)</sup>。

では、「同盟」はなんの成果も生み出すことなく消失してしまったのであろうか。「同盟」を実質的に牽引したスーラとジラルは翌 1924 年に雑誌『*オック Òc*』を発刊させた。この雑誌の活動には、カタルーニャ主義者との深いつながりが関係している。それは次のような事情による。1923 年、プリモ・デ・リベラのクーデタにより独裁政権が樹立されると、1914 年以来認められていたカタルーニャの四県連合「マンコムニダ」が廃止され、多くのカタルーニャ主義者たちは亡命を余儀なくされた。そこで『*オック*』は彼らを支援するキャンペーンを張るだけでなく、彼らを迎え入れたのである。1926 年には、カタルーニャ主義者ジョゼフ・カルボネルが、その主宰する雑誌『*芸術の友 l'Amic de les Arts*』の特集号の編集をジラルに任せ、「オクシタニー」の特集を組んでいる。この号において、オクシタニーとカタルーニャの連帯と結合が主張され、カルボネルをはじめ、多くのカタルーニャ主義者やオクシタニー支持者らがこの主張を共有した<sup>16)</sup>。

ここで、『*オック*』は具体的にどのような主張を掲げる雑誌だったのか見てみよう。発刊当初の『*オック*』は、「南仏国民要求行動委員会」や「南仏祖国同盟」のような政治的、経済的な要求を前面に掲げる活動を展開したわけではなかった。少なくとも 1930 年までは、『*オック*』は「オクシタニー」の政治的、経済的復興よりも知的復興を重視している点に特徴がある。アブラートは、これを「文化的オクシタニスム」と評している<sup>17)</sup>。また、彼らは「オック語書籍友の会 *L'association des Amis du Livre Occitan*」と「オクシタン出版 *L'Editorial Occitan*」

を設立し、前者が後者を資金援助する形で、後者からは雑誌『オクシタン年報 L'Almanach Occitan』が発刊された。『オクシタン年報』や『オック』からは、さまざまなオック語の文学作品が出版されている。

それでは『オック』の同人らは政治的・経済的要求をまったく放棄してしまったのであろうか。1925年に設立された「オクシタン・グループ Occitan Groupe」は、雑誌『オクシタンのしおり Feuillet Occitans』を発行したが、そこに当代気鋭のオック語の知識人たちを糾合し、地域主義、オクシタン経済と文化の擁護の主張を展開させている。さらに一種の商工会議所である「オフィス・オクシタン L'Office Occitan」を介して、「オクシタニー」の農産物、商品、工業製品などの宣伝を同誌に掲載するなどしている。ジラルールやスーラらは積極的にこの『オクシタンのしおり』に寄稿しているのである。1926年には読者に対し、雑誌『オック』と『オクシタンのしおり』の共同購読をも提案したりしている<sup>18)</sup>。このように必ずしも『オック』を中心とする活動が、文化的活動に閉じこもっているわけではなく、それまで見られなかった商工業ネットワークと結合するという新たな一面を見せている。

上記のことから雑誌『オック』は、「文化的オクシタニズム」のみならず「政治的オクシタニズム」を成熟させ、運動を伝統主義、地方主義、アカデミズムから解放しつつ、「自治 *autonomie*」の要求へと発展させる機能を果たしていたと言える。

しかしながら、第一次世界大戦後に「フェリブリージュ」批判を展開した諸グループは、ある意味では「フェリブリージュ」の傍流に位置する勢力である。では、主流派の「フェリブリージュ」は、この同じ時期にいったいどのような活動をおこなっていたのであろうか。「フェリブリージュ」のカプリエ、マリウス・ジュヴォーを中心に、かれを取り巻くフェリーブルの動向という視点を中心に考察してみたい。

## 第2節 ジュヴォー体制

1919年、ヴァレール・ベルナルに代わってジョゼフ・ファラン Joseph Fallen がカプリエとなったが、その3年後にはマリウス・ジュヴォー Marius Jouveau が「コンシストワール」の圧倒的多数をもってカプリエに選出された。思想的には共和派であり、その点ではドゥヴォリユイの後継者とも目される人物であった。彼をカプリエに選出した人々も、ジュヴォーがドゥヴォリユイのように、沈滞した「フェリブリージュ」の起死回生に大きな役割を果たしてくれるのではないかと期待したのである<sup>19)</sup>。

新しい「コンシストワール」の体制は、カプリエのジュヴォーを中心に、フォンタン、パレー、カメラ、ジョゼフ・ルウベ Joseph Loubet、ダルヴォー、ドゥ・パロンセリ-ジャヴォン、エスチウ、ペルボスクらによって構成されていた。さらに1927年から1937年にかけてジョゼフ・サルヴァ Joseph Salvat、アントワヌ・コニオ Antoine Conio、ファルニエ、ピエール・ア

ゼマ Pierre Azémat, テシエ, ダニエル・アルノー Daniel Arnaud, ミストラル・ヌヴェー, レイモン・リゾップ Raymond Rizop, エミール・リペール Emile Ripert, プルーノ・デュラン Bruno Durand, ピエール・レニエ Pierre Reynier らがマジョラルに任命されている<sup>20)</sup>。

この新体制の顔触れを見ると、前述の「マイヤヌ宣言」, 「南仏国民要求行動委員会」および「南仏祖国同盟」にかかわった人々と重複していることがわかる。ここで、メンバーがほとんど重複するにもかかわらず、なぜ「フェリブリージュ」と別枠の組織によって行動する必要があったのだろうかという疑問が出てくる。それには二つの理由が考えられる。一つには「フェリブリージュ」内の王党派の存在と、もう一つは「正字法」の問題からくる要請であった。

ジュヴォーのカプリエ選出は「コンシストワール」の全会一致の総意に基づいていた。前述のように、ジュヴォーのカプリエ抜擢はドゥヴォリュイの改革路線を継承することを期待されたのであった。かれを支える「コンシストワール」のメンバーも、「フェリブリージュ」の改革に賛同する人々であった。それにもかかわらず、「フェリブリージュ」とは一線を画するかたちで、別動組織「南仏国民要求行動委員会」, 「南仏祖国同盟」を立ち上げたのである。前述のマジョラルらのジュヴォーに対する期待は大きかったにもかかわらず、かれは政治的な活動にかかわることに躊躇を示している。ジュヴォーは、カプリエに就任した1922年、前述の「マイヤヌ宣言」への署名を拒否した。前述のように、「マイヤヌ宣言」は王党派の主張とも結びつくことは述べたが、ジュヴォーとマジョラルたちは、「アクション・フランセーズ」に肩入れする王党派の存在が、「フェリブリージュ」内に軋轢を生みだす元凶だと考えたからであった。実際、ドゥヴォリュイ追い落としにまつわる王党派の画策は拙稿において考察したとおりである<sup>21)</sup>。しかし、ジュヴォーは王党派のフェリーブルたちを組織内から駆逐しようなどと考えたわけではない。彼らが自らの政治的選好を公言しようとも、「フェリブリージュ」を巻き込まなければ問題ないのである。政治的な目標を掲げることによるフェリーブルらの対立が、組織そのものの瓦解につながることを恐れたのである<sup>22)</sup>。

しかし、ジュヴォーは政治的活動への関与に慎重だったが、決して無関心だったというわけではない。1924年の国民議会総選挙では選挙活動にかかわろうとさえしたことがあった。『オック』第19号には「フェリーブルと選挙」と題して、「プロヴァンスのマントゥナンスは今年(1924年、筆者挿入)、各エスコロを通じて代議士立候補者らに、初等学校におけるプロヴァンスの歴史、文学、プロヴァンス語の教育に関する要望書を提出した。問題は世論の前にも提示された。トゥーロン、マルセイユ、アルルの選挙区選出の代議士らはもろ手を挙げて要望書に署名をした」<sup>23)</sup>と主張している。また1927年には、ジュヴォーはアルプおよびプロヴァンスの農業労働組合の総会に招待され、「フェリブリージュ」と労働組合の類似性を強調する演説をおこなった。その趣旨は、両者はおのおの異なるやり方ではあるが、ともにプロヴァンスの利益を守ろうとしているのである、ということであった<sup>24)</sup>。

ここで言えることは、ジュヴォーが「フェリブリージュ」の運動を、文学研究やフォークロアの研究に特化することなく、政治的な活動にもコミットさせる姿勢を見せているということである。その点では、第一次世界大戦後の新世代と目指す方向は同じであったと考えられる。では、なぜ彼らと大同団結して運動を展開することができなかつたのであろうか。王党派の問題については前述した。第二の理由として、正字法の問題もまた重要な意味を持っていた点について次に論じたい<sup>25)</sup>。

ドゥヴォリュイのリコールの原因として、この正字法の問題をめぐる対立があったことは前述した。1919年にトゥールーズにおいて、エスチウとベルボスクによって設立された「エスコラ・オクシタナ L'Escola Occitana」は、「フェリブリージュ」の下部組織であるにもかかわらず、正字法としてミストラル方式ではなく、エスチウとベルボスクの古典的方式を採用した<sup>26)</sup>。しかしトゥールーズには、すでに「エスコロ・ムンディノ」が存在していた。「ムンディノ」を指導していたのはアンドレ・スレイユとルイ・アリベールである。「オクシタナ」は古典的正字法を採用したのに対し、「ムンディノ」は古典的正字法でもなくミストラル方式でもない、両者を折衷させた第三の正字法を求めて模索を続けた<sup>27)</sup>。

しかし、第一次世界大戦後、「ムンディノ」の力は低下してきており、古典的正字法を使用した雑誌が相次いで発刊された。「オクシタナ」が発行する雑誌『ガイ・サベ Lo Gai Saber』と前述の『オック』である。ジュヴォーは『オック』とほとんど交渉を持たなかつた。『オック』と「フェリブリージュ」は互いを批判しあっていたからである。では、両者はまったく没交渉であったのであろうか。ジュヴォーは「南仏祖国同盟」に加入し、『オクシタン年報』に寄稿したりしている。『オック』と『オクシタン年報』はともにジラールとスーラが中心となって発刊されていることは前述した。ということは、ジュヴォーは必ずしも彼らとの関係を断ってしまっていたわけではなく、一定の距離を置きながらも緩やかな関係を維持していたと考えられる。またそのような距離を取ることで、かえって共存することができていたと言えよう<sup>28)</sup>。

前節で述べた「オフィス・オクシタン」と『オクシタンのしおり』の結合の試みも、1927年には挫折してしまった<sup>29)</sup>。『オクシタン年報』も1928年には終刊する<sup>30)</sup>。それでもなお、雑誌『オック』は「オクシタン文化の推進」<sup>31)</sup>の使命を続行する。雑誌『オック』の活動は、「フェリブリージュ」の伝統主義や地方主義を批判しながらもこれと絶縁することなく、「フェリブリージュ」との関係を維持しようとしているように思われる。ここでは、「フェリブリージュ」と『オック』が別組織として表面的には距離を置きながら活動しつつも、フェリブルらが『オック』に寄稿するなど双方の活動に接点が存在していた点を確認しておきたい。

次に、「フェリブリージュ」と「エスコラ・オクシタナ」の関係はどのように築かれていたのであろうか。「エスコラ・オクシタナ」は「フェリブリージュ」の下部組織であることは前述した。しかし、「エスコラ・オクシタナ」の活動を、「フェリブリージュ」以上に積極的に支

援していた組織が存在していた。それは「花の競詩アカデミー L'Académie des Jeux Floraux」という組織である<sup>32)</sup>。

この組織は1323年にトゥールーズで、その原型となる組織が設立されたと言われている。その主な活動は、毎年、オック語による詩作コンクールを開催することであった。組織は1694年に「花の競詩アカデミー」となったが、使用される言語はフランス語であった。革命期には一時的に活動停止状態に追い込まれたが、19世紀に入ると活動を再開し、フランス語による詩作とオック語による詩作コンクールを復活させた。このアカデミーの会員のなかに5人の「フェリブリージュ」のマジョラルがいた。「エスコラ・オクシタナ」の代表ドゥザザール・ドゥ・モンゲリヤール Desazars de montgailhard もその一人であったが、彼は「フェリブリージュ」のマジョラルであるにもかかわらず、「コンシストワール」にはまったく出席しなかった。ドゥ・モンゲリヤールが「フェリブリージュ」よりも「エスコラ・オクシタナ」を重視していることがうかがえる<sup>33)</sup>。

また「エスコラ・オクシタナ」の機関雑誌『ガイ・サベ』は、「花の競詩アカデミー」のコンクールの模様を掲載するなど、「フェリブリージュ」の下部組織ではなく、さながら「花の競詩アカデミー」の下部組織のような様相を呈していたのである。

では、『オック』と『ガイ・サベ』の関係はどのようなものであったのか。ともに古典的正字法を採用しているところから、協力関係があっても不思議ではない。事実、ジラルとスーラは「エスコラ・オクシタナ」に加盟し、ジラルはその副書記をも務めている<sup>34)</sup>。前述のように『ガイ・サベ』は「エスコラ・オクシタナ」の機関雑誌であり、ジラルも同誌に文章を発表している。

しかし、ジラルは「花の競詩アカデミー」について「オック語のコンクールを復活したといっても、それは表面的なものであり、むしろフランス語のコンクールのほうに重点が置かれている」と非難し、1925年には『ガイ・サベ』への寄稿をやめている<sup>35)</sup>。

ここに、ジラルとジュヴォーとの間に接点が生じるのである。前述のように、「フェリブリージュ」本部とそのトゥールーズの下部機関である「エスコラ・オクシタナ」の関係は疎遠であり、ジュヴォーは、むしろ同じトゥールーズにおいて、「フェリブリージュ」の周辺組織であるジラルやスーラの『オック』と良好な関係を築いている。『オック』は前述のように、1924年の総選挙へのプロヴァンス支部会の関与を伝えるなど、「フェリブリージュ」の動向に関心を払っている。

以上のことから、第一次世界大戦後から1920年代における「フェリブリージュ」の活動の特徴について、次のようにまとめることができよう。まず、「フェリブリージュ」の活動は、「コンシストワール」の思惑と末端組織のエスコロのそれは一致していなかった。その活動は「フェリブリージュ」指導部の管理下にあるものというよりも、独自の方針に基づき、他の機関との



提携なども自由に行っていた実態が見て取れるのである<sup>36)</sup>。とりわけ「エスコラ・オクシタナ」のように、しばしば「フェリブリージュ」本部の意に逆らうような活動をするものもあったのである。

従来の「フェリブリージュ」の活動のイニシアティブをとったのは一部の「マジョラル」たちであった。しかし、第一次世界大戦に従軍した末端のフェリーブルらの批判は「フェリブリージュ」執行部をも動かし、「フェリブリージュ」の枠を越えた大衆性を帯びた運動へと発展していった点に注目したい。

そのような動きが収斂したものが、雑誌『オック』の活動であった。その活動状況に関して注目すべき点がある。それは『オック』が書籍の出版を中心とした「文化的オクシタニスム」を推進するとともに、『オクシタンのしおり』のような別組織との連携により、オック語復興とは直接関係のない領域にも影響力を持っている点である。このような文化的活動領域と政治的領域の分担という特徴は1930年代にも引き継がれていくのである。

## 第2章 1930年代における「オクシタン研究協会」と新聞『オクシタニオ』の台頭

1930年代に入ると、雑誌『オック』のほかに、さまざまな組織や雑誌が続々と発足した。これらの動きは1920年代における雑誌『オック』を中心とした経験の延長上に考えられるものであるが、大きく異なるのは、活動形態がより集団的かつ組織的になったという点である。この点に関して、イスマエル・ジラルが、「新しいことが、この第二の10年間（1928-1938）に起こった。若者のグループの誕生である。それこそ私の考えでは最も重要で決定的なことであった。その時までには、活動は熱心な個人の幸運な仕事でしかなかったが常に孤立していた。この時以後、集団の複数の意思によって動くグループが現れた」<sup>37)</sup>と述べているように、従来の活動は組織として動くというよりは、むしろ他に抜きん出た「個人」に依存したものであった。

### 第1節 「オクシタン研究協会」設立と正字法論争

1930年代の変化を促したのが、カタルーニャでの共和主義政府の成立と1932年レンヌで起こった暴動をきっかけとしたブルターニュでの自治要求運動であった<sup>38)</sup>。

1930年代のフランスの政界においては、右派と左派の二極化が進行していた。ここで言う右派とは、「アクション・フランセーズ」や「火の十字団」に代表される、フランス・ファシズム勢力であり、左派とは、社会主義および共産主義勢力である。1931年にスペインで共和政が宣言され、その翌年カタルーニャで「カタルーニャ共和派左派 l'Esquerra Republicana de Catalunya」による自治政府（ジェネラリタート Generalitat）が成立した。「オクシタニー」に隣接するカタルーニャにおいて生じたこの出来事により、前述の「マイヤーヌ宣言」以来、

王党派と結びつけて見られていた「フェデラリズム」を左派と結びつける可能性が出てきたのである。

またブルターニュでの自治要求に対し、支持を表明したのがフランス共産党であった。このことも「オクシタニー」の自治を要求する動きと左派との結びつきを促すこととなった。こうした状況に呼応するように「オクシタニー」の三つの都市において新たな組織が活動を始めるのである。モンペリエでは「ヌーヴォー・ラングドック Le Nouveau Languedoc」が、トゥールーズでは「学生トゥールーズ Los Estudiants Ramondencs」と「オクシタン研究協会 La Societat d'Estudis Occitans」が、そしてマルセイユでは『犁 L'araire』<sup>すき</sup>がそれぞれ設立された<sup>39)</sup>。以下、これらの組織について個別に検討してみたい。

『犁』は1933年、ポール・リカール Paul Ricard（後年、パステイス醸造所の経営により富豪として有名）、ジョルジュ・ルブール Georges Reboul、シャルル・カンブルー Charles Camproux によって設立された新聞である<sup>40)</sup>。

「ヌーヴォー・ラングドック」は、もともとモンペリエ大学の学生を対象にして組織され、ジラルル、シャルル・カンブルー Charles Camproux らの支援を得つつマックス・ルーケット Max Rouquette、ロジェ・バルト Roger Barthe らを中心に活動は展開された。その政治プログラムは「社会諸階級の団結、穏和なフェデラリズム、ラテン思想」を含む内容を持つものであった<sup>41)</sup>。「フェデラリズムとラテン思想」を標榜する点は、19世紀のドゥ・リカールや1892年の「フェデラリズム宣言」を想起させる<sup>42)</sup>。「ヌーヴォー・ラングドック」の「フェデラリズム」の中身については第3章第2節において論じることとする。

「ヌーヴォー・ラングドック」はその設立当初、学生対象の一種の「エスコロ」のような性格を持っていたと考えられ、実際、その活動も月例会を中心に、歴史講座や語学講座、酒宴、遠足などが実態であった。その点では「フェリブリージュ」の活動と大差ないものであったと思われる。しかし1931年以後、ラジオ放送を始動することで、広く一般の大衆への働きかけを行うなど運動の拡大を見た。出版物にしても日刊紙「レクレール L'Eclair」（王党派）、「ル・プチ・メリディオナル Le Petit Méridional」（左派）、「ル・スウド Le Sud」の3紙に、毎週、解説記事を掲載するなどしている。こうして「ヌーヴォー・ラングドック」は、ラングドックの日常的な現実問題を大衆へ向けて訴えかけ、これと取り組んでいく方向に活動をシフトさせていくのである<sup>43)</sup>。

さらに同じころ（1930年）、「オクシタン研究協会 La Société d'Etudes Occitanes 以下、SEO」が、ジラルルを初代代表として発足した。この組織の構想には、カタルーニャ主義者ジョゼフ・カルボネルのジラルルへの助言が大きく影響しており、「カタルーニャ研究学院 l'Institut d'Estudis Catalans」（1907年設立）を参考に組織化され、その「支所」と見られるほどであった。なかでも「カタルーニャ研究学院」の文献学部門の責任者ポンペウ・ファブラ

Pompeu Fabra は、SEO の創設メンバーとして参画していた。このような蜜月関係のなかから、スペインからフランスにまたがるカタルーニャをもふくめた「大オクシタニー」構想が議論されることもあった。前述の雑誌『オック』は、1931年から1933年までSEOの公的雑誌として位置づけられていたが、これはアリベール（事務局長）とカルボネル主宰による、カタルーニャと「オクシタニー」の共同機関誌という性格を持つものでもあった<sup>44)</sup>。

SEOについて、もう一つ指摘しておかなければならないことがある。それは正字法に関する議論である。アリベールは「エスコロ・ムンディノ」の有力な活動家で、ミストラル方式とも古典的正字法とも違う第三の正字法の確立を主張していたことはすでに述べた。アリベールの努力は“新生”『オック』とSEOにおいて定式化され、その実現に向けて大きく前進することとなった。雑誌『オック』がエスチウ・ペルボスク方式を採用していたことは前述したが、1927年から1929年にかけてジラルとアリベールの関係が強化され、SEO創設にあたって、そのメンバーとなったのである<sup>45)</sup>。

アリベールの方式は『オック』第131号において次のような3つの主張にまとめられている。それは、「a ミストラル方式とエスチウ・ペルボスクの復古システムとカタルーニャ方式を調停する正字法を確立すること、b 今のところは、互いに妥協しあえないものとして我々が考えている方言の特徴<sup>46)</sup>を保存しつつ、言語を統一し純化すること・・・(以下略) c カタルーニャの学術語彙をモデルにしつつ、厳密な意味で共通の科学技術語彙をオック語に与えること」<sup>47)</sup>である。

ここで注目しなければならないのは「項目 a」と「項目 c」においてカタルーニャが言及されている点である。ここにカタルーニャまでをふくめた「大オクシタニー」構想が関係しているのは想像にかたくない。正字法の問題は単に言語学上の問題にとどまらず、これから建設する「オクシタニー」の「くにかたち」をどうするか、という問題とかかわっていると言ってよい。ミストラル方式を採用することは、プロヴァンス中心主義的性格を強めることとなり、「偏狭な地方主義 un provincialisme étriqué」<sup>48)</sup>との批判を免れえない。また、プロヴァンス方言の正字法をオック語の標準として他の方言地域に強制することは、さながらフランスがオック語に対して営々とおこなってきた抑圧を繰り返すようなものである。

では、より多くの地域のオック語をカバーできる正字法としてのエスチウ・ペルボスク方式を採用することはどうであろうか。これは、より広い地域のオック語を書きあらわすことができるという意味では望ましい選択であるかもしれない。しかしそれではプロヴァンスの離反は避けられない。プロヴァンスを「偏狭な地方主義」と非難していたエスチウ、ペルボスクら「エスコラ・オクシタナ」こそ、逆に「偏狭な地方主義」と誇られても仕方がない。ミストラル方式にせよエスチウ・ペルボスク方式にせよ、いずれの正字法を採用したとしても、オック語を単なる地域言語として、「過去の遺物」として祭り上げてしまうことになりはしないかという疑

問が出てくる。

アリベールが両正字法を調和させ、さらにカタルーニャまで視野に入れた正字法を確立しようとしたことは、オック語をより普遍的な性格を持つ言語としたいという思いの表れであると思われる。したがって、アリベールの正字法を採用することは、言わば、他に対して開かれた「オクシタニー文明の創造」を射程に入れた、重要課題と言ってよい。アリベールの正字法とエスチウ・ペルボスクのそれとの言語学的な比較はここでの課題ではないので詳細に検討することはしないが、その違いはそれほど大きなものではないようである。それは第二次世界大戦後、エスチウ・ペルボスク方式とアリベール方式の統合がスムーズになされていることから推測される<sup>49)</sup>。

以上、3つの正字法の対立から見えてくる「オクシタニー観」の相違について論じたが、これまでに述べてきたところから、「エスコロ・ムンディノ」、「エスコラ・オクシタナ」、SEO（雑誌『オック』）という3つのグループの複雑な関係性の力学が働いているように思われる。

トゥールーズには二つの「フェリブリージュ」の下部機関「エスコロ」があった。すなわち「エスコロ・ムンディノ」と「エスコラ・オクシタナ」である。前者はラングドックで最古の「エスコロ」であるが、第一次世界大戦後、その影響力が低下していたのに対し、後者は戦後作られた新興の「エスコロ」である。後者のバックに「花の競詩アカデミー」があることは前述したが、カトリックに好意的で王党派支持という性格を持つ。その点では「フェリブリージュ」主流派と同じスタンスにある。しかしエスチウ・ペルボスクの正字法を採用している点では、「エスコラ・オクシタナ」は「革新」の立場に位置している。雑誌『オック』は正字法の観点からは「オクシタナ」と共通しているが、「オクシタナ」が実質的に「花の競詩アカデミー」の下部組織と化していると非難していた点については既に述べた。また、「フェリブリージュ」の理事長ジュヴォーが『オック』に寄稿していること、また「フェリブリージュ」が旧態依然とした伝統主義から抜け出そうとする試みに対しては、これを誌面で紹介するなど、柔軟な姿勢で対応していることは前に述べたとおりである。1934年にはこれらの組織を統合するような動きが見られた。カンブルーとルーケットを中心として新聞『オクシタニオ Occitania』が発行されたのがそれである。

## 第2節 新聞『オクシタニオ』

新聞『オクシタニオ』は1933年に発刊された前述の新聞『犁 l'Araire』がもとになっている。しかしその流通範囲はマルセイユに限定されていたため、活動をより広範な地域に広げるべく、マルセイユ、モンペリエ、トゥールーズの若者のグループ（旧『犁』同人、「ヌーヴォー・ラングドック」、「学生トゥールーズ」の他、カタルーニャの学生たち）を糾合する形で発足したのが『オクシタニオ』であった。ここにカタルーニャの学生たちが参加していることから、『オ

クシタニオ』が雑誌『オック』と同じ精神的土壌の上に成立した組織であることがわかる。さらにイタリアのオック語地域の都市トーレ・ペリーチェ Torre Pelice にも寄稿者がおり、カタルーニャから南仏、北イタリアにまで広がる地域をカバーする、これまでにない運動の広がりを示すものと言える<sup>50)</sup>。

『オクシタニオ』は最初から闘争的な性格を闡明に打ち出しており、この雑誌を中心として1936年には「オクシタニスタ党 Parti Occitaniste」が結成され、これは「フェデラリスト」的な理論に基づいて、マルセイユ、モンペリエ、トゥールーズ三都市それぞれにおいて政党が結成されるという構造をとっていた。しかし実際に機能したのはマルセイユのみで、「プロヴァンス党 Partit Provençau」（または「プロヴァンス連邦主義党 Parti Fédéraliste Provençal, PFP」）として活動を展開した<sup>51)</sup>。

1936年には、PFPは選挙キャンペーンで人民戦線と共同歩調をとろうとした。カンブールはブリニョール Brignoles での総選挙の集会で、ジョルジュ・ルブールがプロヴァンス語で演説し大成功を博したこと、そしてブリニョールの人民戦線委員会がルブールに選挙への出馬を要請したことを証言している。しかし結果として、反ファシズムの緊急動員がフランスの左派を中心にして行われると、この共闘を断念した。フランスの左派にとっては「オクシタニー」の問題は関心を引くものではなかった。有権者にとっても、目前で台頭しつつあるファシズム勢力との対決が喫緊の問題であり、「オクシタニー」問題は関心を引かなかったのである<sup>52)</sup>。

しかし、この『オクシタニオ』の経験は、その後の「オクシタン運動」の成立に大きな意味を持った。『オクシタニオ』は、みずからの考えを大衆にアピールするための手段に多大な関心を寄せた。ラジオを利用するのは、すでに「ヌーヴォー・ラングドック」が先鞭をつけていたやり方であったが、カタルーニャでの先例にもならって独自のラジオ局開設を目論んだ。1936年の『オクシタニオ』第32号において次のように提案されている。「協同組合という形によるオクシタニーラジオ協会のようなものが、われわれのフェデラリスト的理想には最も適格的で優れている。フェリブリージュの保護のもとにあり、かつそこではそれぞれのグループが発言の権利を持っている」<sup>53)</sup>と。

ここで注意すべきは、「フェリブリージュ」との関係である。「フェリブリージュ」に対しては一線を画しているとはいえ、決して絶縁ではないという点に注意したい。

この『オクシタニオ』の活動に参画すべくさまざまな政治的傾向のメンバーが集結した。彼らの活動に見られる特徴は二つある。一つは政党政治への興味である。ロジェ・バルトは急進黨、マックス・ルーケットはSFIO（労働者インターナショナルフランス支部）の活動にも参加している。彼らはこれまでの活動以上に政党を必要としている。もう一つは左派への共感を持つメンバーが多いという点である。それはカンブールが代表となり、バルト、ルーケットらが相次いで編集長を務めていることからわかる。そして彼らはこの当時、いわゆる全体主義

者たちによって糾弾されていた議会制民主主義を擁護する立場を堅持していた<sup>54)</sup>。

この時期にヨーロッパレベルで勢力を拡大していたファシズムに対しては、一貫して反ファシズムの立場を貫いた。彼らの主張は次のように要約しよう。彼らは「議会制民主主義には賛成、しかしそれは「オクシタニー」の自治議会を伴う場合である」と主張しているのである。しかし、彼らはフランスの未来についても無関心ではいられなかった。なぜなら、現在のシステムが続いている限りにおいて、フランスがファシズムに巻き込まれることは「オクシタニー」も同じ運命を免れ得ないことを意味するからである。この点で、『オクシタニオ』とフランス人民戦線は共闘しよう可能性を持っているのであるが、一方で「オクシタニー」の問題において、『オクシタニオ』はフランスに対して譲歩するつもりはなかった<sup>55)</sup>。

『オクシタニオ』を語る場合、この二重性を抜きにすることはできない。『オクシタニオ』同人らは、ファシズムの脅威という現実の世界に対する切実な問題意識をオクシタニーの問題意識と結びつけたのだと言えよう。そしてこのオクシタニー意識の高揚を支えた思想的バックボーンこそ「フェデラリズム」であったと思われる。というのも、前述のごとく「フェデラリズム」は「フェリブリージュ」創設当初から、運動を支えるイデオロギー的バックボーンとしての役割を果たしてきたのであるが、1930年代において、いちだんとその重要性を増してきているからである<sup>56)</sup>。そこには『オクシタニオ』の中心人物シャルル・カンブルーが「フェデラリズム」の理論家であることが大きくかかわっているように思われる。この点についても、第3章第2節において論じたい。

1935年、SEOは雑誌『オック』と新聞『オクシタニオ』のセットによる予約購読を開始した。アブラートによれば、前者は「文化的側面」を担当し、後者は「政治的活動とプロパガンダ」を分担した。そして一方は他方に支えられて強化されるのである<sup>57)</sup>。

この「政治的オクシタニズム」と「文化的オクシタニズム」の連携は、1939年にはほぼ達成される。SEOの最大の意義は、この点にこそあると考えられる。

1930年代に入ると、従来、結果的にオック語復興に活動を限定してきた「フェリブリージュ」に代わって、SEOの『オック』がその役割を担うようになった。そして政党結成を試みるなど、政治的性格の濃厚な新聞『オクシタニオ』の活動を支援するという図式が浮かび上がってくる。しかし第二次世界大戦の勃発により、この状況は大きく変わってしまうのである。

### 第3章 戦間期における「フェデラリズム」の理念の継承

戦間期の「フェリブリージュ」、およびその周辺の動向を考察すると、オック語復興運動が政治的主張を具体化しようとするプロセスが見て取れる。その一連の動きの出発点となったのが1922年3月の「マイヤーヌ宣言」であった。第一章において、この宣言がどのような具体

的な成果を生み出したかについては既に述べた。この章においては、第1節で宣言の中身について考察を加えて、1920年代の活動の根底にある「フェデラリズム」の理念を考察する。第2節においては1930年代の活動を理論的に支えたシャルル・カンブルーについて考察を行う。

### 第1節 「マイヤーヌ宣言」

宣言には次のような文言がある。「われわれがなによりもまず要求する自由とは、われわれにとって根本的に思われる自由とは、われわれの言語の使用である。われわれはそれが教育機関のなかで、法廷のなかで、公的な場で、フランス語と同じ位置と同じ名誉を獲得することを望む<sup>58)</sup>と。この「宣言」の特徴は、オック語を国語とすることのみならず、南仏が政治的、経済的な自治を獲得するという要求を含んでいる点にある。そのために、「宣言」は社会、経済、学問、行政などあらゆる分野を網羅する広範な「同盟 *ligue*」を形成することを提案する。その「同盟」を構成する組織体として、「フェリブリージュ」、商工会議所、ブドウ栽培業者総同盟<sup>59)</sup>、牛飼連盟<sup>60)</sup>、県議会、その他、産業、芸術、スポーツにかかわる組織をあげている<sup>61)</sup>。このことは、これまでの「フェリブリージュ」が関与してきた活動とは大きく一線を画する性格を持っていることを指摘せねばならない。従来の「フェリブリージュ」の活動はフェリーブルを相手にしたもので、一般の大衆に向けた運動ではなかった。

この点については、宣言文の起草者の一人フレデリック・ミストラル・ヌヴェーも指摘している。ミストラル・ヌヴェーは、アドルフ・ラジヨワニーの著作『州復興の理論的基礎』<sup>62)</sup>への応答として書簡体の文章を発表している。その中で、ミストラル・ヌヴェーはシャートルナル *Châteaurenard* に創設されたエスコロを引き合いに出し、1922年3月現在、100人のメンバーのなかで、いわゆる知識人や「紳士方 *messieurs*」と呼ばれるメンバーは10人にも満たず、大多数は日常的にプロヴァンス語を話し、農業に従事する農民たちであると述べている<sup>63)</sup>。ミストラル・ヌヴェーのこの指摘からも、運動の主体が従来の貴族や知識人から農民を中心とした一般大衆に変化していることがわかる<sup>64)</sup>。もとより、これまでも大衆に向けた運動に転化する機会がなかったわけではない。それは1907年のブドウ栽培業者の抗議デモ活動であった。第4代カプリエ、ピエール・ドゥヴォリュイ *Pierre Devoluy* も、このデモに「フェリブリージュ」として関わろうとしていたが、重鎮ミストラルの反対によってその機会は失われてしまったのであった。今回は初めて、オック語復興とは直接かかわらない分野の人々との連帯をも公的な形で表明したのである。

宣言文の起草者および賛同者については第1章において触れた。彼らを政治信条で分類するとどのような特徴を指摘することができるであろうか。ミストラル・ヌヴェー、ドゥ・ジェルド、ファルニエ、ラジヨワニーらは王党派であり、とりわけドゥ・ジェルドは「アクション・フランセーズ」の活動に積極的に関わっていた。一方、パレー、カメラ、フォンタン、エステリュ、

テシエ、ドゥヴォリユイらは「アクション・フランセーズ」に反対する立場をとっていた。

彼らが「マイヤーヌ宣言」に賛同したのは、「オクシタニー」の権利擁護を主張するためである。第1章において、「マイヤーヌ宣言」は1892年のモーラスやアムレットイらの「フェデラリズム宣言」を踏襲したものであると述べた。しかしながら両者の主張にまったく違いが見られないというわけではない。「フェデラリズム宣言」と「マイヤーヌ宣言」を比較すると、前者はアンシャン・レジーム期の「フランス」への回帰という側面が強いのに対し、後者では先ほど述べたように「オクシタニー」の権利擁護という側面が強く出ている。そのため、1892年の「フェデラリズム宣言」の起草者シャルル・モーラスは、「オクシタニー」の権利を主張しすぎることで「フランス」を解体させる可能性があるとして、「マイヤーヌ宣言」には署名していない<sup>65)</sup>。このような「フランス」よりも「オクシタニー」の立場を優先させるという側面は、1930年代の運動を理論的に支えたシャルル・カンプルーの思想に受け継がれるのである。

## 第2節 シャルル・カンプルー

1930年代のオック語復興運動を政治的側面から理論化したのがカンプルーである。まずカンプルーの経歴について戦間期の活動を中心に簡単に述べておきたい<sup>66)</sup>。シャルル・カンプルー Charles Camproux (1908-1985) は、マルセイユの労働者地区ベル・ドゥ・メ la Belle de Mai に生まれた。父親が第一次世界大戦で戦死し、苦しい生活を逃れるため、母親によりサレジオ会の宗教施設に預け入れられ、そこで学問的素養を身に着けた。その後モンペリエ大学に進学する一方、しばしばマルセイユに帰省し、ジョルジュ・ルブール、ポール・リカールらと知り合う。1929年から1931年まで、コレージュの教師としてマンド Mende (ロゼール県の県庁所在地) に赴任し、そこで「ヌーヴォー・ラングドック」やモンペリエの「フェリブリージュ」と接触する。また、雑誌『オック』1926 - 1927年号を入手すると、ジラルと文通によって知り合った。そしてジラルの要請によりカンプルーはSEOの設立に参加するのである。1932年にはブルターニュのモルレ Morlaix のコレージュの教師となり、ブルターニュ運動とも接触している。1934年にはルーケットとともに雑誌『オクシタニオ』の創刊に携わったこと、さらに、この『オクシタニオ』が中心となって「オクシタニスト党」が結成されたことについては前述した。この政党活動にカンプルーはルブールやリカールらとともに参加した。ほぼ同時期に(1935年)『オクシタン陣営のために Per lo camp Occitan』を発表し、自らの「フェデラリズム」を明らかにした。

カンプルーの「フェデラリズム」は、「政治的フェデラリズム」、「経済的フェデラリズム」、「社会的フェデラリズム」の3つの側面に分けることができる。「政治的フェデラリズム」は既存の国家の枠組みは保持しつつも、その内部の諸民族 (nationalités) や地域を尊重するものとされる。「経済的フェデラリズム」は計画経済をさしている。そして「社会的フェデラリズム」



は資本家と労働者が参加する組織によって実現されるものとされる。カンブルーは「コルポラシオン corporation」と「サンディカ syndicat」を区別せずに使ってはいるが、「コーポラティズム」を引き合いに出し、選挙区代表と組合代表から構成される地域議会のようなものを構想している。では、どのような人々が具体的な構成員となるのかというと、農民や職人、中小商人らであった。カンブルーの「フェデラリズム」は、ラヴェルによれば「インター・イントラナショナル・フェデラリズム fédéralisme inter- et intranational」という概念を用いて説明されるもので、随所にブルードンの影響をうかがうことができる。その概念について、カンブルーは「国際主義のなかの国内主義 l'intranacionalisme dans l'internacionalisme」と表現している<sup>67)</sup>。この「イントラナショナルリズム」とはどのようなことであろうか。その特色は、既存の国家の役割が国内の諸民族や地域の調整役ないし仲介者として機能することに限定される点である。そのような国家が連合（<sup>フェデレ</sup>fédérer）することが、カンブルーの考える「インターナショナルリズム」である。

アブラートはブルードンの影響について、「伝統的ブルードン主義」とカンブルーのブルードン主義を区別するよう主張している。「フェリブリージュ」がその創設以来、理論的拠り所としてきたのは前者であり、ミストラルは「フェデラリズム」以外の社会変革につながるような内容を切り捨てた。だからこそ「伝統的ブルードン主義」は、モーラスのようなブルードンとは正反対の信条の持ち主にも受容されたのである。しかし、カンブルーはブルードンの思想から、ミストラルが切り捨てた部分を含めて継承しようとしたのである<sup>68)</sup>。

アブラートによれば、1935年に『オクシタニオ』に発表された、「オクシタニスム基本綱領 Programa Occitanista Basic」に見られるブルードン的な側面とは、「個人と集団の独立と自由の尊重」である<sup>69)</sup>。カンブルーは「個人と市民を尊厳において高める」ことを主張している。この点で彼は、彼の理解するマルクス主義と対立する。彼はマルクス主義を「社会の前に個人を無化し、一種の国家の奴隷とする」<sup>70)</sup>ものと考えた。もっとも一方で、資本主義についても結局は「個人の人格の疎外」に行き着くしかないと考えていた。カンブルーは社会を「フェデラリズム」とコーポラティズムによって編成することを考えており、この点に関して「基本綱領」は、社会を構成する細胞因子について、「われわれの社会組織を構成するさまざまな細胞は、市民、家族、コミュニオン、地区、州または地域である。代表者組織はコーポラティズムの原理によって構成される。地区と州のために、地区およびコミュニオンの直接代表が加えられる。州議会はコルポラシオンの代表と地区議会の代表が含まれる」<sup>71)</sup>と述べている。

しかしながら、彼の理論において階級闘争は認められていなかった。このことは大衆と結びつく可能性を削いでしまうことを意味した。「オクシタン・フェデラリズム」は結局ユートピアになってしまうのである。しかし、「基本綱領」に結晶した『オクシタニオ』の経験は、「フェリブリージュ」の硬直した保守主義を乗り越えることに大きく貢献したことは評価しなければ

ならないであろう。

## まとめ

以上、「フェリブリージュ」における「フェデラリズム」理念が戦間期の後継世代に受け継がれていく過程について検討した。かかる検討から次のようなことが明らかとなった。

第一に、「フェリブリージュ」の主流派は、創設当初から懐古趣味的なフォークロアの探求に活動を特化しようとしたが、一方で政治的志向を示すフェリーブルも存在していた<sup>72)</sup>。しかし、その政治的言説は知識人を相手にしたものであり、大衆動員という視点に欠けていた。その意味で、彼らの主張は理念的なものにとどまっていた。第一次世界大戦に従軍した若い世代のフェリーブルらは、非政治的な旧世代の主流派のフェリーブルらと一線を画し、さらに一部の少数派が構築してきた「フェデラリズム」の理念を継承しつつも、政治や経済の領域へと活動の場を具体的に広げようとする動きを見せた。政党に拠って政治的主張を闡明にしようとするのは、第一次世界大戦後の「マイヤース宣言」(1922年)を待たなければならないが、こうした戦間期の行動は、運動の政治化、大衆化を積極的に志向し、推し進めたという点で、運動を画期する性格を持っていたとすることができる。

第二に、「マイヤース宣言」は彼らの活動の出発点であった。かかる「宣言」において提案されたさまざまな領域の組織の「同盟」という構想は、現実的には「南仏祖国同盟」と「フェリブリージュ」の関係をはじめとして、雑誌『オック』と『オクシタンのしおり』の関係、「オクシタン研究協会 SEO」(雑誌『オック』)と新聞『オクシタニオ』の関係など、「宣言」以後の運動の展開において、文化的活動と政治・経済分野との結合の試みとして実践されたのである。とりわけ『オクシタニオ』は、「オクシタニーラジオ協会」の提唱に見られるように、理論としての「フェデラリズム」を実践的な形で大衆にアピールする役割を果たしたのである。アブラートの表現を借りるならば、若い世代のオクシタニストらは『オクシタニオ』の経験を通して、「初めて、彼らが生きている社会の戦いに内側から参加し」、「自らの未来に影響を与えようと試みた」<sup>73)</sup>のである。

最後に、1920年代および1930年代の活動の特徴として、「フェリブリージュ」以外に「オクシタン研究協会 SEO」や新聞『オクシタニオ』など、オック語復興運動を担っていく別組織が誕生したことが挙げられる。そのことは一方で、オック語復興運動を担う組織が公式的な形で複数化してきたということであり、「フェリブリージュ」がオック語復興運動に占める位置の相対的な低下を意味するものでもあった。「フェリブリージュ」は、公式的には非政治性を貫きつつ、個人レベルで政治的主張にもコミットするという点では、その創設以来の特徴を維持していた。

だが、運動の政治化、大衆化という観点からすると、「フェリブリージュ」の分派活動である「オクシタン研究協会 SEO」や新聞『オクシタニオ』の関係においても、前者が公式には文化活動を担い、後者が政治や経済に関わる主張を前面に押し出している点が重要である。この時期、大衆へのアピールという点で、公式に非政治性を標榜する「フェリブリージュ」よりも、SEO/『オクシタニオ』が運動をリードする状況が生まれてきたのである。

第二次世界大戦の勃発以後、ドイツ占領とヴィシー政権とのかかわりから、運動は大きな変化を被ることとなる。次の課題としては、本稿で明らかになったことを踏まえつつ、第二次世界大戦中のヴィシー政権下におけるオック語復興運動について検討することとしたい。

## 注

- 1) 「フェリブリージュ」創設（1854年）時から第一次世界大戦までの考察については、以下の論考を参照。福留邦浩、「『フェリブリージュ』運動の形成とその理念 —— 地域言語復興活動に内在する政治理念<フェデラリズム>をめぐって ——」、『立命館国際研究』第22巻第2号、243-276ページ、2009年。
- 2) Laurent Abrate, *1900/1968 OCCITANIE des idées et des hommes*, IEO, 2001, p.139, p.607, p.609. 新聞『ヴィヴォ・ブルヴェンソ』（“Vivo Prouvènço !”）は1914年に廃刊し、『オックの土地』（“La Terro d’Oc”）は1914年以降不定期発行となっている。
- 3) 「エスコロ *escolo*」はフランス語の「エコール *école*」で、フェリブリージュの組織の末端を構成する単位のことである。
- 4) Calamel/Javel, *La langue d’oc pour étendard — Les félibres (1854—2002)*, Privat, Toulouse, 2002., p.176.
- 5) Abrate, *op.cit.*, p.140. 「エスコロ」は“L’Escolo dou Boumbardament”（設立は1915年）、新聞はフランス語とオック語の二言語併用の“L’Écho de boqueteau”である。
- 6) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.173.
- 7) Abrate, *op.cit.*, p.157.
- 8) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.188.
- 9) Abrate, *op.cit.*, p.155.
- 10) Calamel/Javel, *op.cit.*, p.181. Abrate, *op.cit.*, p.166.
- 11) *ibid.*, p.181.
- 12) Abrate, *op.cit.*, p.168.
- 13) Pierre Lavelle, *OCCITANIE histoire politique et culturelle*, Toulouse.IEO, 2004, p.446.  
「南仏祖国同盟」への賛同者としては、他にドウ・ジェルド、カメララ「アクション・フランセーズ」に共感を示す人々、ドゥヴォリュエイやベルボスク、スーラ、ジラルールら左派の人々の名前も挙げられる。
- 14) 所在地はトゥールーズ、代表者はスーラ。なお、この「IEO」は、第二次世界大戦後の「IEO」と名称は同じものであるが、直接つながる組織ではない。
- 15) Abrate, *op.cit.*, p.180.
- 16) *Ibid.*, p.187. *Per Noste*, N° 20.
- 17) *Ibid.*, p.181.
- 18) *Ibid.*, p.182.

- 19) *Ibid.*, p.192.
- 20) *Ibid.*, p.287.
- 21) 福留, 前掲論文, 264-268 ページ。
- 22) *Ibid.*, p.192..
- 23) *Ibid.*, p.194.
- 24) René Jouveau, *Histoire du Félibrige*, T2 (1914-1940), Nimes, Imprimerie Barnier, 1976, p.118.
- 25) Abrate, *op.cit.*, pp.21-29.
- 26) *Ibid.*, pp.189-191.
- 27) *Ibid.*, p.24.
- 28) *Ibid.*, p.196.
- 29) *Ibid.*, p.182. その挫折の理由の考察については今後の課題としたい。
- 30) *Ibid.*, p.605.
- 31) *Ibid.*, p.182.
- 32) cf. Axel Duboul, *Les Deux Siècles de L'Académie des Jeux floraux*. 2 volumes, 1901.  
François de Gélis, *Histoire critique des Jeux Floraux depuis leur origine jusqu'à leur transformation en académie (1323-1694)*, 1912. Réédition, 1981.
- 33) Abrate, *op.cit.*, p.189.
- 34) *Ibid.*, p.191.
- 35) *Ibid.*, p.210, note 390, p.191. アブラートによれば, 「ジラルールは『エスコラ・オクシタナ』と「花の競詩会」からこれ見よがしに遠ざかった」のである。
- 36) 「『エスコロ』は組織の強い力, 唯一の力である。」 *Ibid.*, p.288.
- 37) *Ibid.*, p.213.
- 38) *Ibid.*, p.213-219.
- 39) *Ibid.*, p.213.
- 40) *Ibid.*, p.259.
- 41) Lavelle, *op.cit.*, p.447.
- 42) 福留, 前掲論文, 第2章および第3章参照。
- 43) Abrate, *op.cit.*, pp.220-222.
- 44) *Ibid.*, pp.233-234. SEO は書類上では 1928 年には存在していた。雑誌『オック』には, ヴァレール・ベルナルル, ルイ・アリベール, ルネ・ネリ, マックス・ルーケット, カンプルーらが寄稿した。
- 45) *Ibid.*, pp.242-243.
- 46) オック語には地域により, プロヴァンス語, ラングドック語, ガスコニュ語, リムーザン語, オーヴェルニュ語などの下位方言が存在する。
- 47) *Ibid.*, pp.236-237.
- 48) *Ibid.*
- 49) *Ibid.*, p.241.
- 50) *Ibid.*, p.259.
- 51) *Ibid.*, p.260.
- 52) *Ibid.*, p.260, p.273.
- 53) *Ibid.*, p.261.

- 54) バルトは1934年4月7日の『オクシタニオ』第2号において次のように述べている。「なさねばならないのは議会制民主主義の告発ではなく、フランス国家のさまざまな民族<sup>ナシオン</sup>に対し、パリを中心とした諸機関を押し付けるシステムを告発することである」と。in *Occitania*, N° 2, 1934.
- 55) Abrate. *op.cit.*, p.264, p.273.
- 56) *Ibid.*, p.264.
- 57) *Ibid.*, p.301.
- 58) Abrate, *op.cit.*, p.165.
- 59) Confédération Générale des Vignerons. 1907年のブドウ栽培業者らの抗議行動の際に結成された組織。
- 60) Nation Gardiane. 1909年、パロンセリ・ジャヴォン Forco de Baroncelli - Javon によってカマルグ地方の闘牛をはじめとする伝統文化をまもるために設立された組織。
- 61) Abrate, *op.cit.*, p.166.
- 62) Adolphe Lajoinie, *Les Bases logiques d'une Restauration provinciale*. Editions de la Revue Méridionale, Bordeaux. 1923.
- 63) Frédéric Mistral (neveu), ...*Nous verrons Berre*, Editions du Feu, Aix en Provence, 1928. sur internet, <http://www.lpl.univ-aix.fr/ciel/> "LETTRE. SUR LA RESTAURATION PROVINCIALE"
- 64) 第一次世界大戦までのフェリブリージュに貴族が多く入会している点については, Calamel/Javel, *op.cit.*, pp.124-125 参照。
- 65) *Ibid.* モーラスにとって、「プロヴァンス」の復興と「フランス」の統一が矛盾するものではないことについては次の文も参照。  
「…この厄介な人物（ミストラルを非難する批評家、筆者註）は、プロヴァンスの復興がどんな利益をわが国に与えるのかを見さえしていない。諸国民の急務は、一方では彼等を荒廃させ褪色させる世界主義からこぞって逃れることであり、他方では彼等を引きさく分離主義的国家主義を脱することであるこの時代に。ミストラルの仕事は、一つの言語、一つの伝統、風俗、習慣の総合体を目醒めしめるもので、それらはフランスの統一に対して最小限の危険をも与えはせず、フランス愛国心の具体的な概念を実現するのに大いに助けとなるものでさえあり、われらを貶しめ、根こぎにし、平均化しようとする一切に対して一つの精力的な抵抗をなそうとするのである。」（出典：シャルル・モーラス（畠中敏郎訳）、『ミストラルの智慧』、青山社、昭和62年、55 - 56 ページ、一部仮名づかいを改めた。）
- 66) Abrate, *op.cit.*, pp.224-225.
- 67) Camproux, *Per lo camp occitan*, Narbonne, Lombard. 1935, p.159.
- 68) *Abrate.*, p.267.
- 69) *Ibid.*, p.307. note, 623.
- 70) *Ibid.*, pp.267-268.
- 71) *Occitania*, N° 22, 1935.
- 72) 福留, 前掲論文。
- 73) Abrate, *op.cit.*, p.262.

## Some attempts to reconstruct the Félibrige during the period between the wars — Succession and practice of the idea of federalism —

After World War I, from 1919 through 1939, instead of the apolitical Félibrige, some félibres (members of the Félibrige) formed sects and made some political demands. These attempts are described chronologically in Chapters 1 and 2.

Their political principle is expressed as federalism. They inherited it from the previous generation: Mistral, De Ricard, Maurras etc., who lacked appeal to the masses. On the contrary, the young generation not only published some magazines and newspapers including *Òc* and *Occitana*, but also organized some political parties.

The “Declaration of Maillane” (1922) was the starting point of their activities. It proposed making a league of various organs. This proposition was realized among some groups: La Ligue de la Patrie Méridionale and the Félibrige, *Òc* and Feuillet Occitans, *Òc* and Occitania and so on.

This period was the turning point for the politicization and popularization of the movement.

(FUKUDOME, Kunihiro, Doctoral Research Student, Graduate School of International Relations,  
Ritsumeikan University)